



吉田年一客員教授が ハンドベルを寄贈

Ⅰ 音域と演奏曲の幅が広がる

金城学院でハンドベルクワイア講師として約30年もの長きにわたり指導をされている吉田年一客員教授が、3月31日にハンドベルを寄贈されました。

寄贈されたのは6オクターブと7オクターブのハンドベル(19個)、5オクターブのハンドチャイム(61個)。20年ほど前から大学ハンドベルクワイアが借用し、学生たちが使っていましたが、

今回あらためて寄贈されたことについて、吉田先生は「金城学院のハンドベルの伝統や演奏レベルを思い、ぜひ今後とも使ってもらいたいと思いました」と話されます。

「6オクターブや7オクターブという音域の広いハンドベルを持っているグループは少なく、音の厚みが増し、演奏曲の幅も広がります。曲の難易度



金城学院ハンドベルクワイア講師
吉田年一客員教授

も高くなりますが、その分、学生のレベルアップにもつながります。金城学院にハンドベルクワイアがある限り、ぜひ使い続けてほしいと願っています」とも話されました。

Ⅱ 伝統を受け継ぎ、協調性を養ってほしい

ハンドベルクワイアは昨年3月に行われたアメリカ演奏旅行中、全米のハンドベル愛好家らが集う大会でコンサートを開催。またワシントン州やデイズニーワールドなどでも演奏を行いました。「大会ではハンドベルのプロもいる前での演奏でしたので、学生もかなり緊張したと思いますが大変好評をいただきました」と吉田先生も笑顔で話されます。

また27年間開催されているクリスマスコンサートではチャイコフスキーの「花のワルツ」とルロイ・アンダーソンの

「クリスマス・フェスティバル」を必ず毎年演奏します。特に「花のワルツ」は吉田先生による編曲であり「金城学院といえばこの2曲といただく方もいます。こうしたハンドベルクワイアの伝統を守り続けたいと思っています」。また学生にはハンドベルを通じて協調性を養ってほしいとも話されます。「ハンドベルは1人ではできない楽器。1人はみんなのためにあるというハンドベルの精神は社会でもきつと役に立ちます」。吉田先生のこうした思いを胸に、学生たちは日々練習に励んでいます。

ハンドベルクワイア部長
英語英米文化学科4年
宮下奈々さん



ハンドベルは中学からずっと続けています。普段は12月のクリスマスコンサートを目標に練習し、また教会や病院などで演奏奉仕も行っています。

部長として、初心者の方が練習についていけるようにサポートすることを心がけています。また自分の演奏をしながら周りの音を聞いて指導ができるよう、練習に臨むようにもしています。

今回、吉田先生からハンドベルを寄贈していただき大変感謝しています。音域は広がれば広がるほど演奏に深みが出るので、とても嬉しく思います。ハンドベルは1人では成り立たないので協調性が大切です。みんなで力を合わせて演奏し、お客様から喜んでいただけたときは言葉にできない達成感があります。これからも金城学院のハンドベルクワイアが国内外で活躍できる存在であるよう、頑張っていきたいと思っています。



ハンドベルクワイアの練習風景

幼稚園では自然も先生



Ⅰ 生き物いっぱい見つかる「こんちゅうジャングル」

私たちの幼稚園は大学構内のたくさんの自然に囲まれ恵まれた環境の中にあります。もちろん園内にも魅力溢れる自然が広がり、今回は子どもたちが大好きなその園庭を紹介したいと思います。

2009年に金城学院120周年記念事業として「子ども道」を南側に設置し



ていただきました。そこは、沢山の木に囲まれ、緑豊かな場所となりました。雑草が茂り昆虫たちには絶好の住処となっているため、子どもたちは「こんちゅうジャングル」と呼んでいます。ダンゴムシやカマキリ、バッタをたくさん見つけることができるこの道は、子どもたちのお気に入りの場所です。夏にはタモと虫カゴを持って1時間以上虫捕りを続ける子もいます。自分で見つけた虫は特別かわいく「飼いたい!」と保育者やおうちの方におねだりする子も。一生懸命お世話をしたり、泣く泣く逃がしてあげたり、ときにはお世話を忘れて死なせてしま

うこともあります。生き物は子どもたちに命の大切さを教えてくれる先生です。虫捕り以外でも、散歩したり、カキヤビワの種を拾い集めたり、カラスノエンドウ(ピーピー豆)を見つけ、中の種を集めたり、笛作りに挑戦したり様々な遊びを見つけ楽しむことが出来ます。

ビワの木の一つは何年も前に子どもが植えた種が芽を出し、今では実ができるほど立派に育っています。自然と触れ合う中でその事象に興味関心を持ち、考え行動に移して遊ぶ子どもたち。気持ちのよい陽だまりの中、今日も新しい発見を楽しみます。

Ⅰ おいしい実のなる木

「先生!この実食べられる?」桜の実などの食べられない実は、子どもたちの砂場遊びや色水作りとして活用されます。では食べられるおいしい実をつける木は園内にどのくらいあるでしょうか。イチゴ、ジューンベリー、ユスラウメ、ブルーベリー、ヤマボウシ、ブラックベリー、ウメ、ビワ、シャシャンボ、ブドウ、カキなど

沢山の自然の恵みがいただけます。「これはねー、ジューンベリーっていうんだよ!でも赤い実は食べちゃダメだからね。黒くなってからがおいしいんだから!」と食べることが大好きな子どもは、どの実が美味しいのか経験から学んで仲間に伝えて分け合います。収穫した子たちは「おいしベリー食べたい人



〜?」と各クラスに声をかけながら配り、みんなで食べ物喜びを分かち合います。

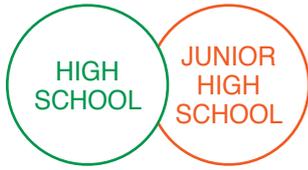
採った実はそのまま食べたり、凍らせて保存しジャムにしておやつでいただくこともありました。ウメジュースを作った年は、夏の年長児のキャンプでいただき、汗をいっぱいかいた子どもたち



にとって、甘すっぱくとても好評でした。

実際に実がなっているところを見て、自分で収穫し食べることで、五感を使い体いっぱい自然を取り込むことが出来ます。

まだまだ紹介しきれませんが、沢山の自然に触れ、季節の移り変わりを身体中で感じ、裸足で遊ぶことができる。この恵み豊かな自然を造られた神さまに感謝し、今日も子どもたちは元気いっぱい園庭を駆け回っています。



健康増進を考えたお弁当を 中学校と高等学校で販売開始

Ⅰ 大学の食環境栄養学科丸山智美教授が監修

中学校と高等学校では、4月12日よりお弁当の注文販売を行っています。そのきっかけとなったのは、私学展や学校説明会です。共働き家庭の保護者から、「毎日お弁当を作ることが難しいときもある」「お弁当の販売はありますか?」との声が上がりました。「金城学院で学びたくてもこうした理由から入学を断念せざるを得ない生徒もいるかもしれない」ということから、昨年10月よりお弁当販売の検討を開始。金城学院として安全・安心で食育につながるお弁当を販売しようと、思春期の女子の体や健康について研究を行っている金城学院大学生活環境学部食環境栄養学科の丸山智美教授に監修していただくことになりました。

お弁当の販売会社は、数ある中から料理のバランスや彩りが一番よかったところに決定。メニューは毎回、丸山教授がチェックを行います。「エネルギーやタンパク質、脂質などを『日本

人の食事摂取基準』を基準にしてチェックします。特に食塩相当量は多くなりがちなので、注意しています。また女子のお弁当なのでデザートを一品入れています」と丸山教授。「食塩や脂質が多い場合は食材を変更してもらう、下味を抑えてもらうなど、毎回きめ細やかに指導します。またエネルギーが低くなりすぎないようにすることも大切」だと話します。「食事による摂取エネルギーが不足すると、お菓子などの間食をしてしまい、栄養バランスが悪くなります。お弁当はエネルギー量も考えて作られて



メインや副菜など彩り豊か

いますので、これくらいのおかずやごはんはしっかり食べてもらいたいと思います」。

今年2月には希望者による試食会を開催、5日間でのべ230人が試食し「おいしい」「温かい

ご飯がうれしい」などの声が聞かれました。また3月1日より5日間、中学校で試験販売も実施。初日は65食でしたが、メニューやおいしさが評判を呼んで最終日は158食も販売されました。1食450円で、現在は高等学校で1日平均30から50食、中学校で70~100食の注文があります。

今後は保護者向けの試食会や丸山教授による栄養の講演会なども検討予定。健康増進と食育を考えた金城学院ならではの弁当は、忙しいお母様方をバックアップし、生徒たちの健康も促します。





読書感想画中央コンクールで奨励賞 金城学院中学3年生、赤尾あゆみさん

Ⅰ 渦とグラデーションで時間の流れを表現

金城学院中学校3年生の赤尾あゆみさんが全国学校図書館協議会第28回読書感想画中央コンクール中学校の部で奨励賞を受賞しました。全国で70万1000点を超える応募作品の中から選ばれたもので、本を読んだ感動や感想を絵で表現する感想画での入賞は金城学院中学校で初の快挙です。

赤尾さんが描いたのはミヒヤエル・エンデ「モモ」。小学校5年生のときに最初に読んでから、何度も読み返した大好きなファンタジー作品です。

「読んだ年齢によって物語から伝わってくるものが違う作品でした。時間について考えさせられたり、モモの生き方に共感できるところが選んだ理由です」と赤尾さん。

「モモの光の部分と灰色の男たちと

いう時間泥棒が放つ陰の部分の対比、そして物語に出てくる時間の花の三つを中心に描きました」。夏休み中の2週間をかけて完成。元々読書も絵を描くことも好きで、「モモ」がくれた感動を絵で表現したいとの思いで取り組みました。

「時間の流れを表現することが一番難しかったです。渦をグラデーションのように描き、モモの周りからは黄色で暖かさを、灰色の男たちからは冷たいイメージを暗い色で表しました」。何回も読んで下書きを構成、色と気持ちを重ねていきました。

「筆を進めるうち、

モモの感情が今まで以上に伝わってくると同時に、描いている時間が長かった分、灰色の男たちのことも考えながら描いたので、作品の見方が広がりました。これからもいい本との出会いがあればまた描いてみたいです。そのためにも本をたくさん読みたいと思っています」と赤尾さんは話していました。



2016年度卒業生進路状況

今年度の金城学院大学への進学者数は、内部推薦者188名に一般推薦・受験での進学者20名を加えて計208名(卒業生全体の55%)で、内部推薦では多くの生徒が第一希望の学科に進学することができました。

外部受験コースでは国公立大学合格者が

東京外国語大学1名・名古屋工業大学3名・名古屋市立大学4名・岐阜大学3名・九州大学1名など合計18名となりました。

私立大学へも早稲田大学6名をはじめ慶應義塾大学2名、上智大学3名、東京理科大学2名、青山学院大学9名、明治大学7名、立教大学13名、同志社大学6名、立命館大学

8名、南山大学47名、愛知医科大学(医)2名、愛知学院大学(歯)2名など多くの合格者をだすことができました。

また、「協定校推薦制度」を利用し、関西学院大学へは12名、同志社女子大学へは4名の生徒が進学をしていきました。卒業生の今後のご活躍をお祈りしています。

国公立大	15	専修・各種学校	0
私立大	129	就職	0
金城学院大学	208	進学準備	23
国立短期大学	0	その他(海外大学進学)	1
私立短期大学	4	卒業生総数	380

(進学者実数)